

# IMAJ

ニュース

NO.80

発行年月日 1996年4月26日  
発行所 (社)国際MRA日本協会  
〒113 東京都文京区千駄木5-49-2  
ベガハウスミタケビル102  
TEL.03-3821-3737  
FAX.03-3821-6479

発行人 住友 義輝  
編集人 加藤 保之  
頒価 1部200円

## 第19回MRA国際キャンペーン特集号



*Odawara International Dialogue*

小田原国際ダイアローグ

### 『和解と共生への課題』

*An Agenda for Reconciliation and Kyosei*

主催：社国際MRA日本協会、アジアセンター-ODAWARA  
後援：文部省、外務省、小田原市、総合研究開発機構(NIRA)  
財松下政経塾、東京フォーラム、ジャパン・タイムズ

●小田原国際ダイアローグ (開会の挨拶をする小沢良明小田原市長)

### 《総合テーマ》『和解と共生への課題』

●期間：1995年10月7日～17日 ●場所：神戸、小田原、東京 =小田原と東京で国際ダイアローグも開催=

第十九回MRA国際キャンペーン(総合テーマ「和解と共生への課題」)が、去る十月七日から十七日まで神戸を皮切りに小田原、東京で開催されました。戦後五〇年を迎えた日本が、過去の清算も含めて、いかに世界との新しい信頼関係を築いていくべきか、また、冷戦後イデオロギーや軍事力以上に重要な要因となった、文化、宗教、アイデンティティー等への理解に基づく共生への道をいかに模索していけば良いのか。

海外から紛争解決や信頼醸成に直接関わったり、精神的要因やモラルに基づく紛争解決の事例を研究したゲストを迎え、各地で幅広い対話を行いました。

#### □主な内容□

- ◆東京国際ダイアローグレポート 2P
- ◆小田原国際会議レポート (小田原国際ダイアローグ) 9P
- ◆ワールドレター 14P
- ◆良知国際会議レポート 16P



ル・グルグリーノ・デソウザ議長が開会の挨拶を行いました。「今週まさにユーゴスラビアの悲劇に持続的な解決をもたらすという、その第一歩が踏みだされようとしています。お互いの文化・宗教・アイデンティティを理解する必要があるとすれば、今こそ、その時期でありましょう。」

国連はここ数年、民族と紛争解決の問題について専門的な活動を拡大しております。平和維持、また人道的な目的の介入に関するプログラムにおいては、信頼の醸成と予防外交を重視した活動をしています。本日の会議におけるディスカッションは、理解と和解を促進する国連の努力を補完するものと期待しております。」

### 日本の平和創造への取り組み

続いて、外務省の山崎隆一郎総合政策局審議官が特別講演を行い、予防外交の重要性が広く叫ばれるに至った背景と、国連や世界各地の地域機関による取り組みについて話しました。また、日本の予防外交および平和創造への貢献についても、次の

ように述べました。

「我が国は他の国々に先駆け、一九八〇年代から国連の場で予防外交を提唱してきております。例えば一九八八年に、国連総会でコンセンサス採択された『紛争予防宣言』は、国連憲章に依拠しつつ、紛争の予防措置に焦点を当て、国連諸機関の果たすべき役割を体系的に位置づけたものですが、これは一九八四年以来、我が国を含む西側六カ国が共同で作業してきたものの結果でした。また一九九一年に採択された『事実調査宣言』も、我が国が共同提案国の一国として、採択に向けて努力したものです。一九九二年の『平和のための課題』、これを議論する作業部会にも、日本としては非常に積極的に、ニューヨークで議論に参加してきました。」

アジア地域においては、カンボジア問題解決への取組に際し、我が国がクメール・ルージュも含めた四派による包括的な政治解決を唱え、これに反対する西側諸国の説得に当たりました。またカンボジア復興開発会議を我が国で開催し、和平達成によるインセンティブを紛争当

事者たちに理解させたことも、その後の和平プロセスに良い影響を与えたであろうと、我々としては理解しています。更に、ARF(ASEAN地域フォーラム)の発足の提唱に止まらず、今年八月の第二回目のARFの外務大臣レベルで行われた会合で、信頼醸成措置に関するシンポジウムを、日本とインドネシアが共同で開催することも決定しております。

他に一、二例をあげますと、マケドニアで活動するOSCE紛争予防ミッションには、我が国からも何人か人を出している他、マケドニア、アルバニアへも紛争予防の観点から経済援助を行う『予防援助』も行っています。例えば六月にはマケドニアへの五億円のノン・プロジェクト無償供与が発表されていますし、近々アルバニアへの約十七億の円借款が署名される予定です。つい先週には、この国連大学において、日本と国連大学などの共催により、アフリカ紛争問題に関するハイレベル・シンポジウムを開催し、アフリカ地域における紛争と開発の問題について、議論が行なわれました。」

## NGOの草の根の活動と個人のレベルでの和解

山崎審議官は、NGOが果たす役割についても、次のように述べました。

「旧ユーゴスラビア、旧ソ連、ソマリア、ルワンダなどの例に見られるとおり、今日の紛争は国家対国家という構図ではなく、国内問題として発生することが圧倒的に多くなっています。従って、このような紛争の防止のためには、国内における信頼醸成や和解の重要性が極めて大きく、そのための予防や仲介活動が必要となってきます。しかし、このような国内問題の解決に対しては、国際機関や外国政府などが成し得ることに、一定の制限というか、限界があります。国際社会には一般に内政不干渉の原則があり、ある国の国内紛争に関して他の国の意思を強制しようとすれば、これはむしろ新たな国家間の紛争を生じかねません。また、いかに善意の第三者が国内紛争について平和的解決の提案を行ったり、強制行動をとろうとしても、当事者に真の解決の意志がない限りだめな訳です。」

「このような状況におきまして、非政府団体、すなわちNGOが個人レベル、あるいは草の根レベルで行い得る役割は、たいへん大きな意義と可能性を有しているといえます。国家レベルの対立も、あるいは国内の様々なグループの対立も、突き詰めればその構成員である一人ひとりの人間の対立とも言えるわけですから、個人のレベルでの和解が、その上のレベルに繋がっていくということです。」

「それは一朝一夕には目に見える効果は生じないかもしれませんが、政府という公式な立場からは届かない、もっと深い根の部分において紛争の根源の撲滅と和解を生じ得るもの、平和の文化を築く力として活動し得るもの、と考えられます。」

### 『一人ひとりの内なる気づきと変革』がもたらした紛争解決

このダイアログには、個人のレベルでの和解が、その上部構造である国や民族同士の和解に繋がるといふことを、まさに身をもって経験された方々、また紛争解決における、そのような要素について詳細な研究を行った方々が、パネリストとして

参加しました。

彼らは『一人ひとりの内なる気づきと変革』が紛争解決や信頼醸成につながったことについて、自らの貴重な体験を具体的に述べながら話しました。

### 南アのアパルトヘイト撤廃における、オランダ改革派教会の役割

アメリカのダグラス・ジョンストン戦略国際問題研究所（CSIS）副所長は、七年程前から、ジンバブエやニカラグア、南アフリカなどにおける紛争解決の事例を詳細に研究し、その成果を昨年『Religion, The Missing Dimension of Statecraft』（宗教—国際関係における忘れられた要素—）という本にまとめました。

ジョンストン副所長は、南アフリカの事例について次のように述べました。

「当初、オランダの改革派教会は、アパルトヘイト（人種差別政策）を正当化していました。また彼らはアパルトヘイトを正当化するだけでなく、日常生活においても、それを行っていました。しかしながら、このオランダ改革派教会の全ての人々が参画していた訳ではありませんでした。」

一人の英雄バイヤ・ノウデ、彼は将来のオランダ改革派教会の指導者と目される人物でありましたが、アパルトヘイトの最初の頃に、アパルトヘイト反対の主義を唱え、破門されました。そこで彼は異なる民族のグループを集め、アパルトヘイトに対して戦った訳です。

結局、このオランダの改革派教会は最後には『人種差別というのは罪である。我々は聖書に反していた。我々はここで謝罪をした。』と宣言しました。その後二日間、全員がそれぞれ罪を認め合い、現状を放置してき



●ジョンストン副所長と山崎審議官

た罪を、少なくともアパルトヘイトに反対をしなかった罪を認め合い、謝罪しました。それが和解の精神を築くことに繋がりました。

これは非常に大切なことです。南アというのは非常に宗教の力が強い国であって、国民の四分の三は教会に実際に通う人々です。従って、ここにおける改革派教会の役割は非常に重要だった訳です。

しかし、謝罪というのは安易な方策だ、すまなかったというのは簡単だが、その後はどうするのかという反論も黒人の中に



●スミス氏と城山助教授

はあります。土地改革等の具体的な問題を片付けなければ、まだ最終的な答えは出ないということなんです。とはいえ、教会の努力は現在も続けられています。草の根のレベルで大変な努力をして、和解の精神を広げています。実際に関与して暴力を防ぐという、その努力は評価すべき大きな成功例であると思います。

### ジンバブエの無血独立

続いて、キリスト教に出会ったことから、それまでの放蕩な生活をあらため、その後は『良心の内閣』のメンバーとして、ジンバブエの無血独立に貢献したアレック・スミス氏が話をしました。

「私の国にも南アのアパルトヘイトと同じような制度がありました。少数の白人が経済や政治を統括し、その下で黒人が非常に苦勞をしていました。しかし、私はそれが問題だということに全然気づかずにおりました。例えばレストランに行きまして、お茶を飲むという時に、そのテーブルに座っている人達というのは、全て白人でありま

した。黒人も中におりましたけれども、その人たちはウエイター、ウエイトレスとして仕事をしていた訳です。二〇人の内の十九人は全て黒人であるのに、若い時の私は、そういう状況が見えておりませんでした。そして、社会全体が私と同じように物事が見えていない状況であったのです。

その結果として、国内において内戦が発生しました。ゲリラ、あるいは愛国戦線といったような組織がつけられ、政府を転覆させようとした訳ですが、その当時のローデシアの首相は私の父が務めておりました。私は非常に恵まれた生活をしていましたが、それは当然だと思っておりました、それを良い方に生かすのではなく、乱用したのである。私は、国のほとんどの人達が、そんな特権を持つことができないならば死んでもいい、と思うような特権を持つていた訳ですが、それを乱用したのであります。

その後、あるきっかけから信仰を持ち、キリスト教徒になりました。それによって、国に何が本当に起きているのか見えるようになりました。それは人種

上の分裂によって国が崩壊しつつあるということでした。そして私は、この政治プロセスを改革するために自らを投ずるという決意をいたしました。MRAがその当時、平和と理解と和解をわが国にもたらすべく努力をしていたわけですが、私もMRAと共に活動をするようになりました。

一九七九年に、ロンドンのラシカスター・ハウスでようやく和平合意が成立し、一九八〇年に選挙が実施されました。その結果、ムガベ氏の率いるZANUという政党が勝利し、ジンバブエは自由の国として独立をいたしました。

それまでには、様々な政治的問題解決をはかる会議がありました。例えば、地中海上にありましたタイガーとか、フィアレスというような戦艦の上で行われた会議やヘンリー・キッシンジャー氏が、ジュネーブの国連でまとめた会議です。しかし、これらの会議も問題を解決するには至りませんでした。そして、その間内戦はずっと続いており、毎日人々が死んでいきました。その様な状況下、政治的な変化をもたらす上でMRAは

大きな役割を果たしました。いろいろな要素が絡んでおり、それが最終的な和平の実現に繋がったわけですが、その中でも、MRAの働きは重要なものの一つでした。

一九七五年にソールズベリという、当時のローデシアの首都でMRAの会議が行われました。これは国際的な会議であり、世界中から、また国内からも、様々な分野の方々が参加しました。政界だけではなく、ビジネス界、あるいは黒人の代表等々が参加をいたしました。もちろん、そういう人たちが参加をしたのは、お互いに合意をしていたからではなく、MRAがそれまで行ってきた活動に敬意を表したわけです。

ひとつ例を上げますと、その会議に参加した方の中に、白人のソールズベリ大学の先生がおりました。その人は会議をとおりして、自分の心の変化に気がつきました。学者ではありませんが、大学の黒人の同僚たちを軽蔑していたことを反省したので、会議の後、黒人の同僚の先生に『自分の方があなたよりも優れていると思っていたことを謝りたい』と言ひ、それによつ

て、二人の間に新しい関係が生まれました。

その後、この会議に参加していた人を招待して夕食会をしたかどうか、ということになりました。この夕食会は何回か行われ、いろいろな人が参加しました。私も参加いたしました。あるとき私の父の政府の法務長官が来ておりましたが、そこで彼は、自分が数年前にサインをして刑務所に入れた黒人指導者と、夕食をすることになりました。大変気まずい思いをしたことでしょうが、しかしながら、そこで初めて顔を合わせ、子供もいる、妻もいる、また夢もあるし、問題もある—そういうお互い同じ人間だというベースで話をするのができたわけです。このような夕食会が十五ヶ月位にわたって、毎月定期的に行われました。そして、そこから『良心の内閣』というものが生まれ、独立直後まで会合が続けられました。

ランカスター・ハウスの大きな会議の時にも、イギリスMRAの施設において、そのようなインフォーマルな会合が開かれていました。平和的な新しい状況をもたらしための話し合いを

非公式な場で行なつたわけですが、この事がひとつのプラスの要素になりました。黒人の指導者も招待されましたし、私の父もランカスターハウスの近くにあるMRAの施設にいきました。アジェンダもなく圧力もなく、ただ話をする、あるいは内省をする。そういった事ができる場所を与えられたことを大変感謝しておりました。ある時、ゲリラのリーダーが私の父に近づいてきました。ムガベ軍の將軍でしたが、『平和のために努力をしよう』と言つたそうです。

一九八〇年に選挙が行われましたが、白人の政府軍は『黒人には政権を許さない』といつて、選挙で負けそうになるとクーデターを計画しました。全国にゲリラの拠点がありました。全国が、選挙投票日の前日、あらゆるゲリラの拠点を空爆するといふ計画が立てられました。すでに街のあちこちに軍が配備され、テレビ局、ラジオ局なども占領されており、とにかくクーデター開始という命令を待っているだけの状況にまでなっていました。その時『良心の内閣』のメンバーが集まり、何とかこの厳しい状況を回避する方法は

ないかと話し合いました。その時、ある若者が『ムガベ氏とスミス首相を会わせたらどうか』と提案をしたのですが、この若者はムガベ氏の参謀の甥でありました。彼は大変な努力をし、夜遅くになってムガベ氏と私の父を引き合わせることに成功しました。そして長い話し合いの末、二人の間には信頼関係が生まれたのです。翌日、ムガベ氏が国営テレビに出て『過去のことを忘れましょう。そして握手をし、力をあわせて新しい国づくりを一緒にしていきましょう』と呼びかけました。国



●デソウザ学長(右から2人目)と記念撮影

民和解政策をジンバブエの将来のためにとりましますよ、という約束をしたのです。私の父も放送に出て、白人の国民に向けて呼びかけました。その結果、私の国はクーデターを回避し、平和裏に独立いたしました。まさにこれは奇跡的なことでありました。」

## 紛争解決におけるMRAの特色

東京大学法学部の城山英明助教は、紛争解決におけるNGOの役割について話をしました。城山助教は、NIRA（総合研究開発機構）の委託により、三つのNGOを比較研究しましたが、その研究対象のひとつとなったMRAについては、次のように述べました。

「MRAは一九三八年にフランス・ブックマンによって設立されており、ここで研究した三つのNGOの中では突出して古いものです。第二次世界大戦後の独仏和解、あるいは日本の（特に一九五〇年代の）国際社会への復帰、あるいは一九八〇年のジンバブエ独立の過程や、最近ではフィジーにおけるインド系とフィジー系の和解、これが大

体九〇年から九二年の話ですが、こういった局面で活躍しています。

NGOとしてのMRAの特色としては、三点ほど考えられるのではないかと思います。ひとつは、確かにアデナウアーとシューマンの間だとか、イアン・スミスとムガベの間だとか、そういうハイレベルの政治家の接触の機会を持たせるといふことはあるわけですが、それだけではなく、あくまでも様々なレベルでの民間交流のうちのひとつとして、そういうハイレベルの接触が位置づけられたという点であります。

例えばドイツとフランスの関係につきましては、一九四六年から五一年の間に三〇〇人以上のドイツ人が、スイスのコトを訪れて、フランス人とつきあう機会を持ったわけです。彼ら三〇〇〇人のドイツ人が実際に交流し、いろいろな経験をしたのです。

第二に、当事者の間の心理的な障壁を取り除いて和解のきっかけをつくる、という心理的手法とでもいえるべきもの、特に『個人的なレベルでの謝罪と許し』というもののサイクルをど

うやって促していくかが重視されたと言えます。そういう心理的な転換を可能にする舞台装置として、おいしい食事と美しい景色のある場所というのが配慮されたのでしょう。

三つ目の特色として、（紛争解決には、その入口から出口迄いろいろな段階があるわけですが）解決という最終的な出口ではなく信頼できる当事者同士のネットワークづくりを行う、という極めて入口の段階を重視したことがあげられます。紛争解決というものを最初から目的とするのではなく、あくまでもそれは最終的な副産物である、という立場に徹してきた。このことは大変重要な特色であろうと思います。」

## 自分自身との和解

四人目のパネリストは、カンボジアのレニー・パンさんでした。レニーさんの夫、ソテイ・パン元カンボジア副首相兼教育大臣は、一九七五年のポル・ポト派の首都侵攻の際、レニーさんと三人の子供を米国に逃して自分は国に残り、殺されました。ポル・ポト派を憎んだレニ

ーさんは、独仏和解に活躍したイレエヌ・ロー夫人との出会いによって、その後ポル・ポト派を許す決心をし、現在はカンボジア子供教育基金（CCCF）代表として、各派に分断された子供たちに共通の教育を与えることを通して国民和解を推進しています。

「今日は、私の心がいかに和解をしたかという事をお話したいと思います。九年前、私はコーに行きました。その頃私の心は本当に死んだも同然でした。いつ精神病になってもおかしくないという状況でしたが、友人が救いの手を差し延べ、コトに連れて行ってくれました。」

ある日、友人に『許しのスピーチができるか』と聞かれ、私はやってみると返事をしました。五分間のスピーチのために三日間かけて準備をしました。クメール・ルーージュ（ポル・ポト派）に対して、あなた方が私の夫を殺したことを許す、というふうに書くわけですが、どうしても書けなくて、一行書くごとに紙を捨てました。三日三番眠ることができませんでした。友人にその原稿を渡さなければいけないという、その前日でし



●発言するレニー・パン氏

たけれども、自分自身に言いました。『憎しみや復讐心は持ち続ける事は出来ないよ』そして私はクメール・ルージュという言葉をついに書きました。スピーチの当日、私は涙を流すこともなく自分が書いた原稿を読みました。六〇〇人の世界中から集まった人々の前に立ってスピーチをいたしました。クメール・ルージュという言葉を口にした時、私は本当にクメール・ルージュを憎んでいるという自分を自分自身認識しました。でも『許してあげる』と言ったのです。スピーチを終えた

時、会場は本当に静かでした。最後に、私はこう言いました。『私は今、大きな憎しみという爆弾を放棄しました。そして私は心が自由になりました。憎しみの爆弾を放棄して初めて、心が自由になり国を救うことができます』その後アメリカの家に帰ると、コーで何をして来たのか息子に聞かれました。私は『クメール・ルージュを許すと言ってきたのよ』と言いました。息子は『頭がおかしくなったの』と言いました。『自分の目の前で家族を殺した人達に向かってそんな事が言えるの。お父さんを殺された僕には、クメール・ルージュを許すなんていう事は出来ない。お母さんだってそんな事は出来ないでしょ』と言われました。『じゃあ、どうするの』と私は聞きました。息子は、『殺せ』と言いました。ポル・ポトを殺せばいいと言ったのです。『でもポル・ポトは一人じゃないでしょ、どうするの』と言うと『たくさん殺せばいい』と言いました。私は『一体何人殺せばいいと思っているの』と言いました。そして息子は最後に『何人殺せば満足出来るのかわ

からない』と言ったのです。その時の話から、息子は私の気持ちがあわかったようです。しかし友人の前でそういう話が出来ても、敵の前で本当にそれが出来るでしょうか。許しには三つの段階があると思います。まず自分自身と戦うことです。彼らは自分を殺そうとしている。しかし、その相手すらも許さなければならぬ。そういう戦いを自分自身の心とやらなければいけない訳です。そしてその次には、自分の友人の前で『本当に許すんだ』という宣言をしなければならぬのです。そして二年たつてから、私はクメール・ルージュのキャンプに行きました。それまでは誰も入れてもらえないというところでした。カンボジア子供教育基金というグループで行ったのですが、とにかく、そのクメール・ルージュのキャンプに行くことが出来ました。そこには、四〇人くらいの人がいました。すべてクメール・ルージュの人たちです。男の人も女の人もいました。顔を見ると、殺人鬼のような顔をしていると私には思えました。でも私は心の中で、彼らも人間なんだ、それ以外のもの

として見てはならない、と思いました。ある男性が立ち上がり、『この一〇年間、パンさんのような方が教育プロジェクトのためにやってくるというようなことはありませんでした。本当によく来てくださいました』という挨拶をしました。そして、その男性は『教育カリキュラムを作る時に、カンボジアの子供たちは国のために、ベトナムの子供たちを殺さなければならぬ。さもなくば、自分たちが殺されてしまい、国を守ることができない』と続けました。そこで私は、彼の言葉をさえぎって言いました。『あなた達は私の夫を殺したんですよ。私はあなた達を本当に憎んでいます。あなた達は殺人者です。カンボジアに非常に大きな被害をもたらしました。私はあなた達を憎んでいるし、あなた達を殺したい。私は銃弾一発では殺しません。肉を少しずつ切り取って、一滴一滴死ぬまで血が流れるような殺し方をしてやりたい。私はそれ程あなた達を憎んでいます。そんな憎しみを忘れて許すことなどできません』私は、そこに集ま

ったクメール・ルージュの人たちを一人ひとり見回して、そう言ったのです。中には涙を流した人もいました。私は感情的に話をしませんでした。怒鳴ったりもしませんでした。冷静に話しました。『あなた方に私を許してくれるように頼みます。私もあなた方を許さなければならぬ。これから手を携えて国の再建をしていきましょう』と言いました。

その時から私は、自分の傷が癒された、怒りや復讐心から解放された、ということに気がついたのです。そしてその後いろいろな活動ができるようになりました。民族の和解は今始まったばかりです。私たち一人ひとりが役割を担っていかなければなりません。まず自分自身との和解をすることが第一です。それは易しいことではありません。憎しみはあなたに害をなすだけであり、しかしなかなかその憎しみを放棄することはできません。クメール・ルージュというのは実在します。でも皆さんの心の中にはそれぞれのクメール・ルージュがいるのではないのでしょうか。夫であったり、妻であつたり、子供であつたり、親であつたり、憎しみを抱く人、好きになれない人、心の中にいるのではないのでしょうか。私たち一人ひとりの心の中にクメール・ルージュがいると言えます。新しい世界をもたらすために、子供達に新しい世界をもたらすために、私たち自身との和解が必

要になるのです。もちろん物理的に外の人たち、外部の人たちが私たちに助けを提供することはできません。でも自分自身との和解は、自分自身しかできないのです。一〇〇〇の戦場で勝利しても、自分自身に勝利することができないならば、それは何の意味もないとフランスでは言いますけれども、あなたが一〇〇〇の戦場で勝ったとしても、自分自身の和解が成立しなければ何にもならないということです。

最後に、私は仏教を信仰するものとして申し上げたいことがあります。お釈迦様は、王子様として大変贅沢な生活をされた。その後苦行、禁欲の生活をなさいました。苦しみを経験されたわけです。その中で、中庸が最善であるという悟りに達せられたわけです。カンボジア

では、この禁欲を経験していません。お腹がすいていること、人を殺すことということはどういうことなのか、ということをも自分自身の目で見、体で経験してきたのです。もうどちらも嫌

だ。そこでカンボジアの人たちは、中庸が良しということ、心を決めたわけです。ですから、皆様にもそれを考えていただきたいと思っています。自分自身を克服する。自分自身と和解する上で四つのことをしたいだきたいと思えます。まず第一は、自分自身を見いだすこと、自分の信仰を発見していただきたいと思えます。第二は道徳、信仰が確立すると道徳心が生まれます。慈悲の心、忍耐、寛容、そういうものが生まれてきます。三つ目には、静かな時間を持つていただきたいと思えます。仏教では心を集中するというわけであり、この静かな時間を持つていただくことは、とても大切なことです。いまや物質主義の世界、情報時代と言われています。あまりにも忙しくて、情報が飛び交っており、静かに座って心を集中する時間というのはありません。しかしそれがとても重要で

す。心を集中することができれば、四番目に知恵が生まれてきます。どうぞ皆さん、この四つのことを覚えておいていただきたいと思えます。

最後に難民を助ける会、また日韓女性親善協会などの会長として、アジアにおける和解と共生の促進に尽力してきた相馬雪香さんが、次のように訴えかけました。

「今日ここに、本当に得難いゲストの方々のお話を伺って、皆様方のお心も本当に一杯になっておられると思います。それだけのエネルギーをどうぞ日本の国が世界と共に歩めるように役立てて頂きたい。過去のいろいろな背負ってきている負の遺産というものをごく、いつたのものに変えていくか、いつた日本が世界に対して何をすべきか、という前進的な気持ちと申しますか、大きい夢をお心にお持ちになつて、今日ここにおいでになったのをご縁に、一歩踏み出してくださいと思うわけでございます。日本は世界を必要としている。そして世界も日本をやはり必要としていると思えます。」

## 小田原国際会議レポート

テーマ『戦後五〇年、今、新たな出発を考えるー新しい自分、家庭、社会、そして世界』

十月十四・十五の両日、アジアセンターODAWARAにおいて、小田原国際会議が開催されました。地元小田原の企業九十六社の協賛も得て開かれたこの会議には、中国やバン格拉デイシユからの在日留学生が招待されたほか、ミャンマー、カンボジア、オーストラリア、イギ



五英書汚染する十賞賞●

●中国からの留学生 孟江霞さん

リス、アメリカ、ジンバブエ、そして日本から延べ二百名近くが参加しました。

二日間を通して、『自分の心を豊かにし、融和のある家庭、そしてより住み良い社会を築くためには何をしていけば良いのか』また『各国の人々との間に信頼関係を築くために、日本の過去のあり方を振り返ると共に、これから一体どのように日本と日本人が、貧富の格差、環境問題や民族紛争といった世界様々な問題の解決に貢献していくべきか』について熱心な話し合いがなされました。



●家族関係についてのワークショップ

## 小田原国際ダイアローグ

十五日に開催された小田原国際ダイアローグ(主催・国際MIRA日本協会、アジアセンターODAWARA、後援・文部省、外務省、小田原市、総合研究開発機構、松下政経塾、東京フオーラム、ジャパン・タイムズ)には、小田原市内外から約一二〇名の方々が出席しました。

このダイアローグには、アメリカからダグラス・ジョンストン氏、カンボジアからレニー・パン氏、ジンバブエからアレック・スミス氏、そして日本からも沢沢雅英氏、相馬雪香氏、堀本崇氏がパネリストとして参加しました。ここでは沢沢氏と堀本氏の発言(抜粋)をご紹介します。

### 沢沢雅英(アジアセンターODAWARA代表)

沢沢氏はアジアセンターODAWARAの創設者の一人であり、戦後数十年間にわたって、信頼醸成などの活動を行ってきました。その後、英国王立国際問題研究所客員研究員、ポルトランド州立大学客員教授等を歴

任し、現在は東京女学館理事長も務めています。

「六〇年代から八〇年代にかけて、日本は異例の規模と速度で、巨額の富と生産手段を手に入れました。日本人は史上、例のない繁栄を手に入れました。政治的にも長期安定を実現しました。戦争の破滅からわずか数十年でこうした成果をもたらしたこと、それは世界史上でも特筆すべき現象でありました。こうした成功の反面で、過去との和解という課題は大半が未解決のままに残りました。その結果、九〇年代の日本はいまだに世界の中で、明確な立場と役割を打ち出すことが出来ないままにいるわけです。中国、韓国では、日本の過去への反省と謝罪は全く不十分である、という批判が非常に強いのが現実です。MIRAは五〇年代以来、この点で日本人の意識の喚起に努めてきました。しかし結果は不十分です。朝鮮半島での搾取、弾圧、占領地域での残虐行為、これは日本人としては弁解の余地のない事実であります。

ドイツのユダヤ人虐殺の場合、一部国民が突出したことで、それが西欧にもとからあった反



う考えがあることも否定できないと思います。

戦争を肯定するかのような保守党の閣僚の発言が頻発しているのは、その延長線の出来事だと思えます。政府はそのつどアジア諸国の非難に屈する形で、閣僚を罷免して収拾をはかっています。日本はそのことがどれほど大きなダメージを対外的に与えているか知っており、すけれども、それでも本格的な贖罪につながるというわけにはいきませんでした。

その理由の一つは、国の中でも、あるいは外でも日本の近代史というものの評価が定まっていなことが、と私は感じております。明治の開国以来四〇年、日本は驚異的な成功をおさめました。しかし、その後の四〇年では日本は自らを破壊し、破滅の中に沈んでいきました。近代化の階段を駆け登って、次は奈落の底に転落していったわけです。そして戦後、再びだれも信じないような経済大国としてまた浮上しました。こうした激しい攻防とその結果には、日本人自身にも理解できない部分がたくさんあるような気がします。その不透明な部分の

中で、じがたいような残虐行為の数々が生まれてきたわけです。

しかし、もちろん日本の歴史は、真空中の中で国内的な理由だけで展開されたわけではありませぬ。日本を近代化に駆り立てた最大の要因は、西欧帝国主義の脅威であったと言えると思います。その後の暴走と侵略は、日本自身の判断ミスと、傲慢さに起因するものがきわめて多いということも、われわれは同意できると思います。しかし、当時の世界秩序に内在する矛盾がそれを増幅させたということも、否定できないと思います。従って、日本の近代史を理解するには、世界歴史全体の文脈の中での再検討がどうしても必要であると思います。その再検討が公正に行われれば、そのとき初めて日本人にとって、過去の和解が可能になるのではないかと思います。そしてアジア諸国に受入れられるよう本格的な贖罪、謝罪も可能になるのではないかと、私は感じております。こうした今後の日本のあり方の基本となるような分野で、MRAの貢献を今後期待できるでしょうか。

## MRAビデオのご案内

日本語吹替版

# 明日を愛するがゆえに

——イレヌ・ロー夫人の生涯——

頒価 5,000円  
(郵送料サービス)

ドイツを仲間外れにして  
ヨーロッパの再建ができますか？

好評頒布中！



独仏の歴史的和解は勇気ある  
人々により始められ、後のEC  
設立の礎となった。

●イレヌ・ロー

1898年生まれ。第二次大戦中、反ナチ抵抗運動の医療班を組織して闘った。三男をゲシュタポに拷問され、フランス人として母親としてドイツとドイツ人を心から憎んだ。戦後間もなくスイスのMRA世界大会に参加したが、ドイツ人がいるのを見て直ちに帰ろうとした。しかし、ブックマン博士に「ドイツ人を除外してどうしてヨーロッパの融合と再建が出来るのか」と説得され、三日三晩寝ずに悩んだ末、ドイツ人を許し憎しみを謝罪した。これが、独仏間の関係改善の道を開き、後のEC設立のきっかけとなった。マルセーユ選出の国会議員や仏社会党中央執行委員等も務め、世界各国を訪れ融和を説いた。1987年、88歳で没する。

お申し込みは  
MRA事務局へ

03(3821)3737

## 堀本崇(松下政経塾研究生)

堀本氏は明治大学政経学部を卒業後、松下政経塾に第十三期生として入塾し、以来、平和問題をテーマに、日本及び海外において幅広い活動を行ってきた。

「私は本当に多くの方々に教えていただきました。カンボジアにも学びましたし、インドにも学びました。」

二年半位前までの私は、口では『平和が大事、平和に日本は貢献しなければいけない』ということを声高に語っておりました。しかし、ある時自分自身のことを振り返ってみたのです。そうすると、ある自分の行動パターンが見えてきました。テレビで例えば『アジア・アフリカの恵まれない子供たちに愛の手を』、『こうしたスローガンと共に、飢えに苦しむ子供たち、目に涙をいっばいいために顔にハエをたからしている子供たち、この映像が出ます。これを見たとき私は『本当にかわいそうだ、一日も早く世界からこうした状況をなくさなければいけない』、そう感じていました。しか

し次の日になりますと、私の頭の中から、そうした思いは一切消えるのです。しかし二、三日後また同じCMを見ますと『ああ、かわいそうだ』、そして次の日また忘れる。こうした本当にどうしようもないサイクルを自分自身で繰り返していた。これに気がつく事が出来ました。

そのとき思いましたのは、私はそれまで人前で『自分にとってのテーマというのは平和問題だ』と語ってききましたけれども、そのとき私は『自分が本当に将来、平和問題に取り組むこととはないだろう。これは、自分自身の思いというのは、うそに近いな』と思つたのです。そして私はインドに行つてきました。貧困とは一体何であるか一平和問題に取り組もうと言つているのに、自分は貧困に苦しむ人々の状況を全く知らないことに気がつきまして、まずインドに行つたわけです。皆さん方もご存じの方が多くと思いますが、インドのカルカッタにマザー・テレサが二〇幾つの施設をやっておられます。その中に『死を待つ人の家』という施設があります。私はそこで一日間ほどボランティア

をして参りました。この時には本当にいろんな事があつたのですが、今の私の活動の遠因になつたかなと思われる出来事が一つありました。

そこでは毎日、人が亡くなつていきます。亡くならない日というのは、ほとんどありませんでした。そこで私はボランティアの最後の日に、死体を清める仕事をさせてもらったのです。アメリカ人のボランティアと一緒にやりました。死体を洗い、ペビーパウダーをつけ、白い布にくるんで、さあ終わつた、そしてふと左側にあつた棚を見たのです。そこには白い布に包まれたものがありました。もう一人のボランティアに『一体これは何だ』と聞いたら、彼は無言でこの白い布を開きました。その時、中から出てきたのは嬰兒の死体だったので。

私はその姿を見た時に、この赤ちゃんは本当にお母さんの顔を見たろうか、お母さんのおっぱいを二口でも飲んだらうか、今日の晴れ渡る空、この空を見ただろうか、そういう事を強烈に感じました。そして自分の日本の生活、日本の状況、日本で語られる平和問題、これら



●バンラディシュからの留学生と談笑する堀本氏(中央はバン氏)

との相当のギャップに非常なショックを受けました。この体験が、私自身の心の中に大きな大きなものとして残っておりまして。それは丁度いまから二年四か月前のことでした。それからカンボジアを初め、アフリカや南米にも行きました。ほとんど貧しい所を回つてまいりました。そして私自身いろんなものを見る中で『本当に自分自身が出る事、やるべき事を探して、一日でも早くそれ始めるようにして行きたい』ということが、いつも心の中に

ありました。去年、七五三基金という名前の民間援助団体をつくりました。それは現在のところ、企業からお金を戴いてカンボジアの教育支援をする、というまだN G Oに毛の生えたようなものですが、そうしたものをつくらせて頂きました。

七月末には、カンボジアに学校を三つプレゼントすることが出来ました。今は第二回目のプロジェクトとして、七五三基金を大きくするという活動をやっ



●会議の合間に談笑する参加者

ているところです。そんな中、いろんな事を感じます。ある場所でちょっとお話をさせていただいた事があったのですが、その時ある御夫婦からお金を預けていただきました。『どんなことでもかまいません。あなたに預けますから、ぜひ子供たちのために役立ててください』ということでお金を預かりまして、学校の改修をさせていただきました。これは七五三基金とは関係ありません。その後、学校が完成したという知らせを受けまして、御夫婦に知らせました。そうしたら何か記念に買ってやってくださいというので、5万円のお金を預かりました。私もいろいろ考えたのですが、その5万円で子供たちに何をプレゼントしたかと申しますと、ブランコと鉄棒と雲梯です。設置費用も含めまして四万五千円で、子供たちにプレゼントすることができました。

そして私は学校に行きました。一五〇人の生徒がいる学校です。ひと言挨拶をさしてもらった後に、一五〇人の子供たちに遊んでもらったわけです。瞬間的に子供たちはその遊具に殺

到しました。鉄棒、はいていうのは隙間がありません。ブランコひとつには四人、五人乗っているわけです。

私はあの子供たちの一五〇の笑顔、そして三〇〇の本当にうれしそうな瞳を忘れることが出来ません。それだけのお金でカンボジアの子供たちに夢を与えることが出来た。これは非常に大事なことにゃないか、そんな感じがしているのです。私たちに出来ることが、本当は一杯あるんじゃないだろうか、そんな感じがするのです。

日本は非常に情報があふれています。例えばテレビをつければ、二十四時間リアルタイムで世界のことを知ることが出来ます。しかし、それがあふれ過ぎているからこそ、その中から何をとって自分のものにして使うか、ということがなかなか出来ないでいるんじゃないか、こんなことを感じざるを得ません。私自身がやらせてもらっている活動は、ぜひその点をクリアして、本当に顔と顔の見える、ただ学校を贈るだけではない、本当に交流できるものにしていきたいと願っています。』

三時間に亘って活発な話し合いがなされた小田原国際ダイアローグは、住友義輝当協会会長の次の挨拶で幕を閉じました。「いま日本に最も必要であるにかかわらず、きわめて不十分なことを昨日と今日にかけまして、このアジアセンターで勉強いたしました。そして今日の午後は、このダイアローグでケース・スタディーを学ぶことができました。」

心の声、誰でも持つております良心の声を聞いて、それに従う、そこに神は働く、それだけのシンプルなことをごさいます。それが、まさに今日お話をうかがいましたように、数々の奇跡を生んで歴史の流れを動かして来た、ということを今日の午後は直接教えられたわけでございます。こんなダイアローグは他に例はございません。主催者といまして、この機会を与えて下さいましたパネリストの方々は言うまでもなく、ご後援いただきました諸団体の皆様方に厚く御礼を申し上げます。最後までご清聴いただきまして、誠にありがとうございます。』

—世界各地でのMRAの活動を皆様にお伝えする—

## ワールドレター

### ◇ポーランドで「自由への基盤」地方会議を開催

昨年暮れから今年一月にかけてポーランドのクラクフで開かれた「自由への基盤」地方会議には、中央・東ヨーロッパ諸国から約四〇名、またその他の国々からも数名の若者が集まり、親交を深め、将来の展望について話し合いました。今回参加したのはリトアニア、ベラルーシ、ウクライナ、ロシア、クロアチア、ブルガリア、チェコ、エングランド、ポーランド、ドイツ、オランダ、イギリス、ケニア、ジャマイカからの若者達で、彼らはこれまでに、それぞれの国またはイギリスで「自由への基盤」研修コースを受けています。

現在エストニアでは今年度第一回目となる「自由への基盤」訪問プログラムが行われており、これは二年前の同国際研修

### ◇南アフリカ共和国でのワークショップ

二月にヨハネスバーグで開かれた、ルスリ王立トランスフォーメーション・センタートとMRAの主催による和解のためのワークショップに約八〇人の人々が参加しました。

ある討論グループには警察官、犯罪の被害者、囚人の権利擁護を訴える人々が同席しました。ある女性参加者は彼女の町に巡回にきた警察官に水ささええないほど彼らを嫌っていました。だが、このデイスカッションでは隣同士で座ることとなりました。また強盗犯罪の被害者は元受刑者と話をしました。その後彼女は次のように語っています。「彼と出会ったことにより、心が癒される方向に向かいました。あれ以来、町を出歩くことの恐怖はなくなりました」

### ◇ブーゲンビル島での信頼醸成プロジェクト

不安定な停戦状態にあるブーゲンビル島で七ヶ月間にわたって開かれたMRAワークショップ

「精神的・実践的トレーニング」には延べ約二千人の住民が参加しました。このワークショップは両武装勢力の支配を受けているコミュニティの要請により実施されたものです。ブーゲンビル革命軍は四日間のワークショップを要求し、兵士たちは武器を携行してこれに臨みました。一五〇人の参加者は、革命軍上層部とパプア・ニューギニア保安軍の和解を目の当たりにしました。

十九回にわたって各地で開かれたワークショップは、道徳や精神的価値観及び平和の創造や信頼の醸成について学び合うプログラムとともに、バランスのとれた食事を用意したりドラム型かまどを作ったりといった実用的な訓練から成り立っていました。これらのワークショップはミルン・ベイ地方から参加した五人のグループによって運営されましたが、行く先々でまた戻ってきて欲しいと切望されました。

この信頼醸成プロジェクトはMRAとミルン・ベイのKBUユース・トレーニング・センターによって実施され、AUSAID (オズエイド)がストラリ

ア政府の開発援助機関)の財政援助を受けています。このプロジェクトの目的は紛争状態にあるブーゲンビルとパプア・ニューギニアの間に信頼関係を回復させることにあります。

ブーゲンビルの地方開発局長ジョブソン・ミサング氏は、最近行われたNGOの会議の際にもこの信頼醸成プロジェクトはブーゲンビルが必要とすることの一例としてしばしば引き合いに出された、と書いています。ワークショップの結果「多くの人が生き方を変えた。以前は妻と共に歩み働くことをせず、家族からも離れて家や庭を構えていた人が、今ではすっかり変わり新しいブーゲンビルに尽くすと誓っている」と同氏は語っています。

### ◇インド紛争地域でのミーティング

少数民族が多数住み、中央政府との軋轢や紛争の続く北東インドの一都市シロンで毎週行われているミーティングに、インド北東部全域から学生が参加しています。このミーティングはカトリック教会の牧師が始めたものですが、この人は二十五年

前にマドラスで上演されたMRAの音楽劇の出演者たちに出会った事により、地元産業の苦境に対する解決策を得たという忘れられない経験を持っていきます。

「我々の全てを飲み込むような変化にこの地域の人々が全く対応できていない」と学生たちは怒りと失望をあらわにしています。彼らは「国の中枢の権力者たちにながしろにされながら、なぜ自分たちだけが高いモラルの意識を保っていかなければならないのか、なぜ力によって対抗しないのか」と問いました。何人かの学生たちは広範囲にわたって内戦が繰り返されている州から参加していました。

しかしこのミーティングで紹介されたソルジェニーツインの「たとえ偽りが世にはびこり力を得ようと、私は決してそれを手染めることはない」という言葉は多くの学生たちの心に響いたようです。

これらのミーティングをきっかけに学生キャンプを開催したり、貧しい農村のためにお金を集めて図書館を作ったりといった活動が生まれています。

## コー50周年記念世界大会のご案内



### メインテーマ

「過去を癒し、未来を築く」

HEALING THE PAST, FORGING THE FUTURE

■1996年6月29日(土)～8月25日(日)

プログラム



- ◇ 6月29日(土)～7月3日(水)  
50周年祝典 (公式式典、感謝祭礼拝、ガーデンパーティー、50年祭記念講演)
- ◇ 7月3日(水)～6日(土)  
未来を築く—21世紀に備えて
- ◇ 7月前半の3日間  
岐路に立つヨーロッパ
- ◇ 7月21日(日)～24日(水)  
コー円卓会議
- ◇ 7月24日(水)～26日(金)  
コー産業人会議
- ◇ 8月3日(土)～7日(水)  
信仰、道義的価値、我々の未来
- ◇ 8月10日(土)～15日(木)  
和解への課題
- ◇ 8月19日(月)～23日(金)  
平和の創造者—女性によるイニシアチブ
- ◇ 8月24日(土)～25日(日)  
最終イベント (オープンデー、ガーデンパーティー)

## 第二回 良知国際会議レポート



去る三月三日(日)、第二回『良知教育国際フォーラム』が良知教育創始者の劉博士、良知教育協会の林会長、そして現場で良知教育を実践されている先生方を含む六名の台湾からのゲストを迎え、神戸の住吉研修所にて開催されました。

### 『内なる心の声』を聴くこと

劉博士は、『良知教育とアジアの将来』のテーマの講演の中

で、二〇世紀が破壊の世紀であったことを指摘した上で、現在の世界の様々な問題を克服し、明るい将来をつくっていくためには、全ての子供たちが『内なる心の声』を聴くことを学ぶ必要があり、その為にも日本には是非、良知教育を普及、実践し、全人類のために貢献して欲しいと訴えられました。

続いて、難民を助ける会の相馬会長は、『今、日本に求められるもの』とのテーマの講演の中で、中江藤樹も『良知』の大切さを唱えていたという事実を挙げながら、日本人が謙虚にならなければ、日本の将来は無い、また日本のために、そして世界のために何をすべきかを、先ず大人たちが心に聴いて実行する必要がある、と強調されました。八〇歳を越えられたお二人の、国をそして世界を想う情熱に溢れた講演は会場を埋めた一〇〇名余の参加者の胸に響きました。

### 良知教育の実践

引き続き、『良知教育の実践』をテーマにフォーラムが開かれ、台湾及び日本側から各々三

名の教育現場に携わられているパネラーの方々より、それぞれの貴重な体験が報告されました。台湾のパネラーの方々の良知教育の具体的な事例の紹介に続き、ポートピア保育園の西舩園長からは、地球を大切に出来るような子供たちを育てるための環境教育の実践について、また甲南小学校の小川先生からは、

昨年良知教育会議で学んだことを活かして、子供たちに『心の声』を聴いてもらった結果や、子供たちの感性を育むための詩を使った教育の成果などの報告があり、また兵庫県子供会連合会の速水事務局長からは、考える機会を与えられた子供たちには人間や社会に対する素晴らしい気づきがあるが、その気づきを大人達が潰してはならない、と具体例を挙げながらの報告がありました。多くの教育関係者の参加した会場からは切実な質問もなされ、今、いかに教育が社会の大きな関心事になっているかを示すような熱気が溢れていました。

九月には、台湾に於ける第三回『良知教育会議』が開催される予定です。関心のある方はMRA事務局にご連絡ください。

## ▼事務局通信△

●ワールドレター掲載のお知らせ  
今号からワールドレターを掲載することになりました。世界各地でのMRAの活動を皆さんにお伝えします。

### ●チャリティバザーのお知らせ

水桃会(婦人会)では、6月上旬にチャリティバザーの開催を予定しています。収益金はコー五〇周年記念世界大会の運営費としてコー・マウンテンハウスへ寄付させていただきます。ご家庭に不要の品(ただし未使用)がありましたら、ご提供下さいますようお願い申し上げます。

### ●スタディーコース便り

オーストラリアのメルボルンにあるMRAアジア太平洋センター『アーマ』を拠点に行われていた第二十一回MRA国際青年育成スタディーコースが去る四月二十一日に終了しました。約三ヶ月間、寝食をともにしながら多彩な研修を受けることを通じて、言葉や人種、宗教の差異を乗り越えてお互いを理解し合い、友情を育むことを目的とするこのスタディーコースには、今回は世界九ヶ国から十五名の若者が参加しました。日本からは柏原征則さんと太田敦之君の二名が参加したほか、オーストラリアに留学中の岩田洋子さんも大学の休暇を利用してコースを受講しました。また元MRAフルタイムの高橋千恵さんも、三年間のニュージランド留学を終えたその足でオーストラリア入りし、約六週間コースの運営を手伝って下さいました。